



## 目からウロコの宇宙論入門

福江 純 著

ミネルヴァ書房 2,400円+税, 208頁

読み物  
お薦め度  
☆☆☆★★

本書はイントロのあと、古代から近代までの宇宙観を述べる。その後、現代的な高密度宇宙や宇宙論の概観を経るが、最後は現在の科学が知り得た宇宙がなぜそうなっているかについて（現代的な要素で構成されているが）やや哲学的な考察で終わり、イントロから続く宇宙観の変遷を記すうえで一応一貫性のある構成になっている。万有引力定数が時間とともに変化すると考える根拠を解説するなど、想像力をかきたてるところもある。

評者は天文を職業としているが、天文は分野が広く、とてもすべての分野に精通してはいない。教育普及の現場で分野外のことを述べるのはやはりとまどいを覚えるものである。しかし、著者は、多くの分野についてエッセンスをつかんでさっそうと分野横断的な読み物を書いた。天文月報の連載などの著者の快刀乱麻ぶりを彷彿としている。

しかし、と、とまどいを覚える。このシリーズは「21世紀を迎え、「学び」と「教え」が大きく変わろうとしています。（中略）時代の動向を見ずえ、新鮮な視点でとらえなおしました。多様化する知への好奇心に応える、新しい時代の基本図書です」ということで書評をお引き受けして大いに期待して読み出して、これは難しい仕事を引き受けてしまったということがわかってきた。同氏には『宇宙のしくみ』（日本実業出版社）という近著があり、こちらでは内容は類似しているがキーになるコンセプトが見開きページの上に書かれ、図や画像も多く、コンパクトでインパクトがある。一方、本書の場合は文章化されている分、読み解くにはより根気が必要になった。それは我慢するとしても、その割には、著者の著作にしては期待

したほどにうなることが少なかった。むろん数式を使わないなど一般向けの配慮もあろうが、中身のコクとでもいうべきものが流失してしまった感じがしてならない。たとえば、ケプラーが「火星の軌道が楕円であることを証明してしまった」（35ページ）という件は、事実史として読む分にはそれでいいのかもしれないが、円ではなく楕円と結論づける決定打のエッセンスは何だったのだろうという不満が残るし、そのエッセンスを知ることが読後の読者の考え方に大きな影響を与えるはずである。何かもう一步踏みこんで書き入れて欲しかったと思うことが多いのである。本書には各分野を切り拓いた人物の紹介があるが、必要以上と思える部分があったり、太陽系の公転周期と軌道半径の関係など、わざわざ図にする意図がくみ取りにくいものもあり、本来の内容とのバランスはもうちょっと考慮の余地があった。単なる文系的な読み物にするか、科学史を目指すか、科学としてエッセンスを凝縮することを目指すか、いろいろ交ざってみる分、一読者として焦点が合わなかった感じがする。欲を言えば、科学には苦闘がつきものであり、人物紹介よりそちらのほうがもっと興味があるのは評者だけであろうか。

人物紹介でいえば、ノーベル賞が3人の日本人物理学者に授けられ、これらの方は宇宙論にも多大な影響力をもった研究内容であったが、残念ながらこれらの方々には紹介されなかった。福江先生をもってしてもノーベル賞を当てるのは難しいということであつたらうか。

長谷川 隆（県立ぐんま天文台）